

神学校だより

JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE
日本バプテスト聖書神学校

＋ 日本バプテスト聖書神学校

Contents 1

校長の机から

石川 実

2017年度前期伝道実習

恋田 寛正

市村 雄治

斎藤 光彦

藤田 夏穂

Contents 2

2017年度前期冬期講座

堀口 和基

石川 高嶺

香川 盛治

藤沢 幸人

神学校の思い出

西牟田 栄

今後の予定

卒業式カンファレンス
卒業式

校長の机から

聖書を どう読むか



校長 石川 実

「イエスは彼に言われた。『律法には、何と書いてありますか。あなたはどのように読んでいますか。』」

(ルカの福音書 10 : 26)

このお言葉は、「よきサマリヤ人」とよばれているイエス様のたとえ話の前置きです。ここには2つの問いがあります。最初の問いである①「律法には、何と書いてありますか」については、さすが律法の専門家です、イエス様から「その通りです」と言われました。ところが、②「あなたはどのように読んでいますか」について、この人は分かっていなかったのです。イエス様は律法を解き明かされました。そして、そのお言葉を実践して行く時に、彼に“気づき”があることを期待されて、「あなたも行って、同じようにしなさい」と言われたのでしょう。

私たちの神学校の目的の第一は、主イエス様の救いのご計画の実現のために、ひたすら働く伝道者を養成することです。そのために、①聖書には、何と書いてあるかを学ぶことは必修です。

しかし、私が強調したいことは、聖書66巻自体が語られているメッセージを読み取ることの重

要性です。宣教や伝道に熱心なキリスト教は、私たちバプテスト・バイブル・フェローシップだけではありません。しかし、残念なことに、聖書からかけ離れているところで行われている場合もあるでしょう。聖書を好きなところを好きなだけ読んで伝道することは、むしろマイナスです。神様が語られたことを読むのはとても難しいのです。

例話として、大手製薬会社研究所長の薬の話します。薬の原料はほとんどは植物からできるそうです。つまり、もとは漢方です。ニンジンという薬があります。色々なことに効くそうですが、古代人は、お腹の薬として知られていました。お腹が下ると、ニンジンを飲むと止まります。便秘をすると、ニンジンを飲むと、お通じがよくなります。ニンジンには、下痢にも便秘にも、両方に効くのです。

ニンジンを分析すると、下痢を止める成分とお通じをつかす成分と両方でできます。その成分を抽出して、後は捨てるそうです。そして、成分をわけて、下痢のときには、こっち。便秘のときには、こっち。というように、一つを飲むのが、西欧の薬です。どっちを飲むかは人間が決めるわけです。ところが、下痢をしたときに、必ずしも止めた方がよいとは限りません。毒が体内にある場合は、もっと下痢をして毒を早く体外に出した方がいいのです。

西欧の薬は、選択した成分が的にあたれば、非常によく効きます。しかし、薬屋さんはそれで良いそうです。100人のうち一人でも的にあたれば、1000人に売れるそうです。効かない人は忘れるが、効いた人は「あれはいいぞ」となるのです。

一方、ニンジンという漢方は、どちらをとった方が良いかを判断するのは、人間ではありません。たぶんニンジンの成分で捨てた中に、その時の体に合わせて、どちらを効かせた方が良いかを選択する成分があるはずだということでした。

私は、この話を聞いて、薬とみ言葉は似ている面があると思いました。聖書をどう読むかは、人間の判断になってはなりません。第二ペテロ1：20、21で教えられているように、聖霊によって書かれたものですから、聖霊によって解釈をされなければなりません。そして、宣教や伝道がなされていかなければなりません。

そのために、神学校は、「聖書に何と書いてあるか」を学ぶことを始めとして、教師も神学生も共に、「聖書をどう読んでいますか」という問いかけを、ご聖霊の導きのうちに絶えず発するところです。そして、イエス様が、「あなたも行って、同じようにしなさい」と言われていますが、机の上の学びだけでなく、それぞれの奉仕教会において、寮生活において、社会において、実際にやってみようとするならば、それができないことを示されて、神様のお取扱いを受けて、聖書をどう読むかを学ぶことでしょう。



2017年度前期伝道実習

2017年10月9日（月）～13日（金）

実習の前半は野の花キャンプ(高槻教会主催)へ参加し、後半は関西諸教会を訪問させていただきました。野の花キャンプの証は、すでに野の花誌にて報告させていただきましたので、後半のご報告です。

実習で学んだこと

4年課程3年

亀岡B B C

こいだ ひろまさ
恋田寛正



野の花キャンプでは主催教会。そして、伝道実習ではリーダーとして務めさせていただいた今回の伝道実習。

一番に注力したのが、野の花キャンプの参加者全員の安全と健康、そして神学生全員が平常心で臨むことでした。伝道実習が始まる前々週から学生の中でカゼが流行り、伝道実習に影響しないよう注意喚起したことが幸いし、主の守りの中で、事故・ケガなく伝道実習を終えることが出来て心から感謝いたします。

野の花キャンプについて、早い段階で主催教会の株本師やルツ師、陰日向でご奉仕下さった兄姉と打合せができ、学生全員ひとりひとりが自覚し

て、野の花キャンプに備えたことは大きな実となりました。

野の花キャンプが終わり、関西へ移ってのスケジュール、多くのプログラムが無事に終えることができたのも大きな実でありました。

各教会の関係者への報・連・相と学生への報・連・相が徹底できたのも、すべての関係者が奉仕、学びをする意識が高く、心一つにしたからだと思います。多くの祈りとお働きに支えて頂いたことを心から感謝致します。

《しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。》Ⅱコリント12章9節

多くの恵みを頂いた伝道実習でした。

伝道実習の証し

4年課程2年

上田BBC

いちむらゆうじ
市村雄治



この度、高槻聖書バプテスト教会にて伝道実習をさせていただき、主に感謝いたします。実習を目前に、私は風邪をひいたり更にこじらせたりと様々ありましたが、直前には癒され、無事に参

加が許されたことも感謝いたします。

高槻教会での伝道実習、主への全き心をもって、学びに専念することができたと願っておりました。結果として、私の不安定な体調の中で、主の豊かな支えを祈りつつ、みこころを求める学びの時となりました。個人目標の一つとして、『自分の体調を把握し、与えられている体力の中で、奉仕と学びとに専念する』ということをおげておりました。これまでの私は、行事ごとになると、後のスケジュールまで考慮することなく無理をし、後半はばててしまうということがよくありました。しかし、今回の実習においては、事前に先輩との必要な交わりやアドバイスもあり、これまでの反省が生かされたことを主にあって感謝しています。また、このことは、普段から意識して、主の働きのために備えていきたいと思います。

私はこれまで、関西の諸教会と関わることがあまりありませんでしたが、今回、亀岡教会、高槻教会、また葛城教会で与えられた礼拝の時、また交わりの時は大きな励ましとなりました。どこにおいても、同じ主を仰ぎ見、共に賛美と礼拝をお捧げできたこと、主にある兄弟姉妹という新たな目が開かれて、主の御栄光を拝しました。

葛城教会においては、森先生から奈良での福音宣教の具体的な実情とお証しを聞き、大変深い学びをいただきました。奈良での、宣教の困難さを聞きながらも、困難以上に主の働きと恵みに心を留めて、宣教されている森先生の姿から、私自身そうでありたいと願わされました。

実習を通して学びを与えてくださった主に感謝いたします。この学びが主に用いられることを信じ期待し、おゆだねしていこうと思います。

伝道実習の証し

4年課程2年

佐倉BBC

さいとうてるひこ
齋藤光彦



主の御名を賛美致します。今回、野の花キャンプから高槻聖書バプテスト教会、亀岡聖書バプテスト教会、葛城伝道所と伝道実習をさせていただきました。キング先生をはじめ諸先生方、教会員の皆様に感謝致します。

この伝道実習を通して示されたことは、人は神様によって生かされているということを改めて教えていただいたことです。神様は、一人一人に計画をもっておられその通りに行われます。その中で様々な問題や困難に出会い、そして悩み、苦しみます。体のしょうがいだけではなく、心のしょうがいもあります。人と人が支えあって生きていくことが大切であり、神様の御心にかなったことだと考えます。今回、主にあって一人一人がそれぞれの賜物を生かして歩ませていただくことが教えられました。

野の花キャンプでは、しょうがいのある方がこのキャンプに参加すること自体、大変なことであると思います。神様の導きを信じ、証されていることは、まさしく神様の栄光をあらわしていることだと思いました。

亀岡聖書バプテスト教会では、水曜日の祈祷会

に出席させていただいた。特別賛美「His word will stand」を賛美させていただいた。3階建ての会堂を見せて頂いた。

高槻聖書バプテスト教会での伝道実習では、宿泊場所、寝具もご手配いただき、また食事の材料の用意にもご配慮をいただき感謝でした。婦人合同集会に出席させていただき、良き交わりの時とさせていただき感謝でした。葛城伝道所では、奈良の地域性と宗教のために戦いが多くある中での伝道の働きについて教えていただき感謝でした。

最終日には、隠れキリシタン記念館を見学することが出来、キリスト教が弾圧されてきた歴史を学んだ。多くの労をしていただいた高槻聖書バプテスト教会の皆様、恋田兄に感謝いたします。

実習で学んだこと

4年課程1年

甲府BBC

ふじた なつほ
藤田夏穂



今回の実習で「愛（アガペー）」について学ぶことができた。野の花キャンプに参加された先生方や兄弟姉妹が障がいを持った兄弟姉妹と交わるときの姿や、森先生から迫害する地域の人々に対しての働き、高槻教会の先生方、兄弟姉妹の働き、そして、体調を崩してしまった私のための皆さんのお祈りを通して、アガペーを見い出すことがで

きた。野の花キャンプでは、障がいを持った兄弟姉妹との再会に心から喜び、迎え、交わり、仕える先生方、兄弟姉妹の姿を見た。イエス様が人々を愛し、一人ひとりを認め、大切にし、そっと側にいるように、参加された一人ひとりの思いを聞いたり、必要なところにそっと仕えたりしていた。

森先生は、どんな迫害を受けても、奈良の人々のために祈ることをやめず、福音を伝えようと努めていた。そこには十字架に掛かるイエス様の姿が見られた。Ⅰペテロ2：23のイエス様のお姿のように、葛城伝道所での働きを神様にゆだねられ、ただ神様を愛し、奈良の人々を愛し仕えていることを見ることができた。

高槻教会での合同レディースミーティングでの献身的な働きに愛を感じ、体調を崩した者へのお祈りから愛を感じることができた。ここに神様の愛があることに気づくことのできる実習となった。主に贖われた人は主の愛を受け取り、主の愛に満たされ、溢れ出す主の愛を他の人々に与えている。それは強いられてするものではなく、心から主を愛し、主に仕えるように人々に仕えている。

野の花キャンプで言葉先生との交わりの中で、人と関わる時、仕える時にどのようにしているかを尋ねると、『『イエス様ならどうするか』を考えている』と聞くことができた。今回の実習で見てきた先生方、兄弟姉妹の中にアガペーを感じられたのも、イエス様が私たちを愛して下さって仕える者となって下さったことと同じように人々を愛し仕えているからだを知る。私はまだまだ愛の足りないものだが、主から受け取る愛をイエス様がしてくださったように、人々をますます愛し、仕えていきたいと改めて示された。

2017年度冬期講座「福音と文化」

2018年1月30日(火)～31日(水)の二日間、金沢教会の斎藤秀文先生、上越教会の加治佐清也先生を講師に神学校で冬期講座がおこなわれました。通信生を始め、多くの兄弟姉妹の出席もあり、興味深い学びのひとときとなりました。



斎藤秀文先生



加治佐清也先生



集合写真

冬期講座を受講して

4年課程1年

千葉BBC

ほりぐちかずき
堀口和基



今回の冬期講座を受講して改めて考えたことは、日本宣教をする上において、日本がどのような歩みをしてきたのかを学ぶ必要があるということです。一般にキリスト教国と言われている国も、ほんの1世紀前までは世界進出（主にアジア地域）をしていましたし、日本もそれになっていました。今思い返すと、改めて授業でも開かれた『義人はいない。ひとりもない。』というローマ3章10節の御言葉が思い出されます。どのような歩みがあって「今」があるのかを理解するために学ぶ必要があることを覚えました。

そして今回新しく学んだことは、異なった文化の方に福音の適用を語る時には、特に注意が必要であることです。

自分の育った文化を基にして語ることが多い中で、語る相手が同じような文化の中で生活してきた方なら大きな問題にはならないですが、異国の方、あるいは語り手とは異なった文化を持っている方に同じことを語ったとしても受け入れることは難しく、本当に悪い場合には文化の衝突を引き起こしてしまい、一番伝えなければならない福音そのものまでが受け入れられなくなってしまう危険性があるということを学びました。

たとえ海外の地へ行くことがなくても、今では日本各地の教会でも多くの外国の方が集うようになっている時代だと思います。その方にも福音を伝える必要がありますが、相手がどのような文化の違いを持っているのかを覚えておく必要があります。狭く見るとしたら家や地域社会、広く見ると民族性や伝統文化など、多くの面で違いが生じてきます。そのことをしっかりと考えて語る必要があることを教えられました。

また、相手に語る上で、その方の善い点を認めることが大事であることも学びました。使徒の働き17章には、パウロがアテネの人たちへ伝道した際、宗教心が熱いという評価をしたことが書かれています。語る際にまず、聞く方の持っている価値観を否定することはせず、理解することが大事であることを学びました。

しかし、考えて語ることを優先しすぎるあまり福音の本質そのものを自分の中で変えてしまう危険性も出てくるのではないかと思います。このことに関連して授業で教えていただいたことは、文化は変化し続けるものであり、それによって当然、文化の適用も変わってくることになるが、福音の本質は決して変わることがないということです。しっかりとそのことを覚えて学びを続けていきたいと思いました。



冬期講座出席の 恵みに与って

4年課程1年
千葉BBC

いしかわたか ね
石川高嶺



はじめに、今回冬期講座に出席出来たことを主に、心から感謝致します。これは書き出しの挨拶ではなく、私自身が直前まで出席の難しい状況に置かれていたからです。まず冬期講座の2週間前から、咳喘息とインフルエンザに掛かり自宅で療養しておりました。冬期講座の週からようやく通学できる状態になったのですが、療養中に期末テストが行われていた為、講座の最中にテストを受けることになりました。日程から考えてまさか休み時間にはできないだろうと思っていたのですが、そのまさかでした…。しかし無事にテストを終え、講座も漏れなく受けることが出来たのは主による恵みだったと心から感謝しています。

さて元々文化について全く興味を持っていなかった私にとって、この講座は出だしから価値のあるものとなりました。「福音と文化」が、聖書から福音を理解し他者へ伝えるまで密接に関わっていることがわかったからです。聖書を理解する上では、聖書が書かれた当時と現在の時間的／地理的な文化の違いが

あること。他者へ伝える上では、情報の送り手と受け手の文化の違いがあることが明確に示されました。特に後者については、両者の世界観・信仰・価値観・状況・言語理解など書ききれないほど様々な要因によって、動的に変わってしまうけれども、福音を伝える上で重要な部分であることに気づくことができました。

また、知らず知らずの内にヨーロッパやアメリカなどの文化の影響を受けた聖書理解を私たちが取り入れていないか、私たちの理解は本当に正しいのかなど見直すきっかけとなったのも大きかったと感じます。

そして何より私を含め、全ての人が文化に染まった人であること、同じ事象を経験しても立場や環境によって、ものの見方が全く違うことも教えられました。聖書だけでなく文化についても受け売りではなく、自ら考え御聖霊によって教えて頂くことが必要だと考えさせられました。

文化を理解し、どのように福音宣教に活かしていくかは正解がなく、一生を掛けて少しずつ学ぶ分野であると思います。ですから日々少しずつ考

え、何よりも自分の足りなさを知り、いつもへりくだって主に拠り頼んでいくこと。私自身が主に造りかえて頂くことの必要性を覚える機会となりました。



「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」

箴言 3章 5～6節

福音と文化の関係性

4年課程3年

浅間BBC

かわせいじ
香川盛治



私は普段、何気なく「福音伝道」、「福音宣教」ということばを使っています。しかし、考えてみると、福音ということばに対して伝道、宣教ということばがついていることをあまり意識しません。今回の講義は、それを意識する時となりました。なぜなら、この講義において何度も出てきた「文化」の中に福音は伝えられるものであることを認識したからです。例えば、北陸地方において、雪とは苦しみや困難をもたらすものであるエピソードがありました。そのような環境下の中で、「雪よりも白くなる」という聖書の言い方をそのままされたとしても、聖められるような表現に感じないというものでした。雪によって苦しみや困難をもたらす人々にとって、雪は聖めを現わす対象にはなりえないようです。金沢の現地のタクシー運転手に、「雪がきれいですね。」と言うと、急に降ろされたことがあるという体験をされた牧師先生もいたとのことでした。

また、聖書の解釈についても同様のよう感じました。例えば、イエス様は、ヨハネ4：14において、「わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して乾くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへ

の水が湧き出ます。」とおっしゃいました。水にほとんど困ることのない日本人の私たちが何気なく見ても、文字通りに見るだけでは、いかにイエス様がくださる永遠のいのちが素晴らしいのかを理解することができません。水に飢え乾く、イスラエル人に語られている視点がなければほぼ無意味です。聖書を理解すること、そして現在置かれている生活空間を理解すること、いずれにしても文化を理解するという視点がポイントのように感じました。

同時に、私は日常生活の中でキリスト者かそうでないかという点に目が向くことが多いです。しかし、私の生きる文化の中には、圧倒的多数のキリスト者ではない人たちがいることを意識するようになりました。その文化の中にキリスト者である私が生かされていることを思うとき、1人のキリスト者の証がもたらす影響の小ささを感じます。そのような中で聖書や神さまを知らない人たちに、どのように証し、またお伝えしていくのかを考えるきっかけになりました。ゆえに、さらにスポットを当てた学びをいただきたいと願いましたし、日々の実践においても養っていききたいと同時に願うときとなりました。



「福音と文化」 を聞いて

4年課程4年

カルバリの丘BC

ふじさわゆき と
藤沢幸人



今回の冬期講座はお二人の講師をお招きして行われた。金沢教会の斎藤秀文師と上越教会の加治佐清也師で、テーマは同じ「福音と文化」である。

加治佐師の講義は、現代における日本人論を紹介することによって、「現在の日本で福音宣教をしていく上で考えなければならないこと。」という視点からの講義であった。特に、古くから伝えられてきた日本人論ではなく、「日本宣教論」2011年・後藤牧人師、「福音と文化」2007年・佐々木正明師、「日本文化論のインチキ」2010年・小谷野敦氏など、現代の日本人論を紹介してくださり、福音宣教の働きに就く者がより広い視野に立って「日本人を考える」ことの必要を痛感させられた。特に同性愛者についての日本での考え方、セクハラで話題になっている渦中の青山繁晴氏のレポートを取り上げられたことなど、加治佐氏の偏見のない見識の広さを存分に発揮されて、冬期講座にスカイプでの出席ながら、参加できたことの恵みを感じた。

斎藤師の「福音と文化」論は、神学校の授業にも加えられるほどの学問的な体系が既に整えられているものであるが、今回の冬期講座では、現代

の日本という文化の中での福音宣教について、的を絞って講義された。それは、「文化」と我々が一般的に呼んでいるものとは何か。そもそも、日本の文化とは何なのか。「武士道の精神」は日本的なのか。第2次世界大戦前の「大家族制」は日本的なのか。この大家族制は日本固有のものなのか。

戦後、アメリカの宣教師によって伝えられたキリスト教は、初代教会の文化的な背景を持つキリスト教がそのまま伝えられたのだろうか。それともアメリカ文化を通したキリスト教ではなかったのか。個人主義と民主主義の国から伝えられたキリスト教は、正しいキリスト教なのか。聖書は個人の権利を重視する個人主義を主張しているのか。果たして、聖書は民主主義を主張しているのだろうか。奴隷制は認めてはいないのか。

斎藤師の様々な問い掛けに、私たちは自分の中にある先入観や今までごく当たり前のように教会で教えられてきて、疑問を持つことなく過ごしてきたことの中に、もう一度よく考えなくてはならないことがあるのではないかと考えさせられる。そして、過去に起きた問題だけでなく、現在国会で議論されている「憲法の改正」についても、「憲法改正に反対」と言わなければ教会員ではないのだろうかと問われる。最後に斎藤師は「神学校やJBBF全体で、日本文化の中で福音をどのように伝えて行くかを模索してほしい。」と締め括られ、教会の中に閉じこもり、聖書だけを見ている伝道者では、その役割を果たすことが出来ない時代に私たちはいるのだと改めて思わされた。

神学校の思い出

神学校時代を 振り返って

亀岡聖書バプテスト教会
西牟田栄



主の御名を賛美致します。いつも神学校の働きのために多くの先生方、スタッフの方々がご奉仕して下さいていることを感謝致します。

先日、神学校便りを担当されている、白石先生（神学校時代の同級生でもあります）とお会いする機会があり、原稿依頼を頂き、引き受けさせて頂きました。

私は神学校の30期生（同期9人・キング校長・杉浦校長時代）で、昨年、卒業して30年、結婚して30年が経ちました。また、0からの開拓伝道を始めて、2020年には30周年を迎えます。神学校入学して今に至るまで、変わらず交わり、励まし、アドバイスを下さる多くの先生・先輩方、また神学校時代に寝食を共にした祈りあい、お交わりのできる仲間が与えられている幸いを感謝しています。いくつか神学校時代の思い出を記してみます。

・神学校と京都の往復

金曜日の授業が終わると、神学生たちは神学校（当時は千葉市にありました）からそれぞれの奉仕教会に戻ります。3年間の前半は、高槻教会のキング先生と、関西・中部地区の神学生たちと車で往復していました。ハプニングもたくさんあり、

雪で通行止めになったり、関ヶ原辺りで車中泊をすることもありました。

・祈祷会

授業が終わると、神学生たちは祈祷会出席のために教会に向います。私は東京教会に出席していました。祈祷会后、私の体調が悪い時などは、上山雄治先生（召天）が運転して神学校まで送って下さることもあり、感謝でした。

・食事

今の神学生たちは、自身で食事作りをされていますが、当時は千葉教会の渡部姉妹が、先生方・神学生たちのため、毎回食事を献身的に作って下さいました。食堂には朝早くから美味しいおいが漂い、食事が待ち遠しかったものです。台所で調理して下さいている姉妹とのカウンター越しのお交わりも楽しみでした。

・授業

お忙しい教会の働きの中、多くの犠牲を払って教鞭をとって下さった先生方に感謝いたします。私の能力では、難しい学びも多かったのですが、先生方はわかりやすく、生きた牧会経験の中からは有意義な学びをして下さいました。その経験談は、私たちの今の働きに役立っています。

・伝道実習

高槻教会では空き地に天幕を張り、天幕集会をおこないました、土砂降りの雨の中で賛美した、

『So Send I You』や、『コーナーストーン』はとても恵まれました。京都教会ではスーパー前の2か所で路傍伝道を行いました。近松三郎先生（召天）の路傍伝道でのあいさつは、70代半ばにして大きな声でかくしゃくとしたもので、良い思い出になっています。

神学校を卒業して、国内・海外に遣わされた兄弟が今は同労者となり、幸いな交わりが与えられています。

同級生、または前後の兄弟の何人かは宣教師となり、現在でも教会訪問という形で教会での滞在と交わりの機会が与えられています。神学生時代に一緒に学んだ兄弟の中には、現在神学校の教師をされている先生もおられ、私の神学校時代でも教鞭を取って下さっていた先生と共に、学生たちの指導に当たられ、私の長男も、昨年の9月から学びに加わらせていただいています。

神様の不思議な導きを感じます。さらに神学校が祝福されますようお祈りいたします。

今後の予定

5月25日	4年生卒業論文提出
31日～6月1日	4年生卒業試験
6月14～20日	後期試験
6月26～29日	卒業カンファレンス
6月29日	卒業式
7月10日	2018年度入学試験
9月 3日	2018年度入学式

編集後記

今回より担当となりました白石です。新しく神学校の思い出を、リレー形式でお願いするコーナーを設けることになりました。バトンが回ってきた時には、是非、原稿をお寄せくださいますようお願いいたします。

【2017年度卒業カンファレンス】

2018年6月26(火)～29日(金)

・ 26日(火)、27日(水)

対象は、おもに神学生、諸教会からの牧師、伝道師向け。(信徒の方も可)

テーマは「イスラエルの礼拝」

(『ヨム・キッパー』『それは箱であった』

『聖書の時間軸』など予定)

・ 28日(木)、29日(金)

対象は、おもに諸教会からの信徒向け

テーマは、「旧約聖書に見る『聖』」

(先生のお証、『イザヤが熱心に見たもの』

『喜びの律法』など予定)



(講師)

アル・ライクマン師

アル・ライクマン博士は
ラージャス師の派遣教会

であるホールマーク教会(テキサス州)に教会員籍をおかれています。先生は、正統派ラビ(ユダヤ教教師)の家庭から、福音を聞かれ、主イエスを救い主として受け入れられました。主の召しによって先生は、おもに全米中のユダヤ人の救いのために、巡回伝道師として大きく主に用いられておられます。(石川 記)

【2017年度卒業式】

2018年6月29日(金)

(説教者) ラバン・ラージャス師